

僕は、振り向かず、そのまま、改札口を入れて、無意識に、いつもの急行電車の方へ向かった。

本当に、これでいいのか。

本当に、手紙を渡して良かったのか。

僕は、不安だった。

もう、そんな事、考えても遅いのに！

本当は、彼女の前に立って、じっと、彼女を見つめて、

そのまま、「お話があるから」とでも言っ

てもいいから、彼女を誘って、

三条大橋を渡って、鴨川の河原で、

きれいな風景と一緒に

三十分でもいいから、のんびり見たい。

「一緒に、そこまでお願いします。」

それだけが、本当は、今の僕が

彼女にお願いしたい事では、ないのか。

あの手紙は、理屈一杯で、本当の僕の気持ちが見えない。

数分前にそれを渡したことを、僕はもう後悔していた。

僕は、急行から飛び降りて、もう一度、

彼女の所へ戻ろうとして、立ち上がった。

しかし、その時、僕の目の前で、電車のドアが閉まった。

前に進むしかない